白鳥舘遺跡第 20 次調査現地説明会資料

令和 3 年 10 月 20 日（水）

調査地点　奥州市前沢字白鳥舘地内
調査期間　令和 3 年 6 月 28 日～
令和 4 年 3 月 31 日（予定）
調査面積　55 ㎡
調査担当　奥州市世界遺産登録推進室
及川真紀
調査目的　今次の調査は、白鳥舘遺跡の整備の事前調査として実施したものです。

今年度は郭Ⅰ東郭群の虎口と平場の状況のほか、丘陵の東裾の遺構分布を確認することを目的としました。

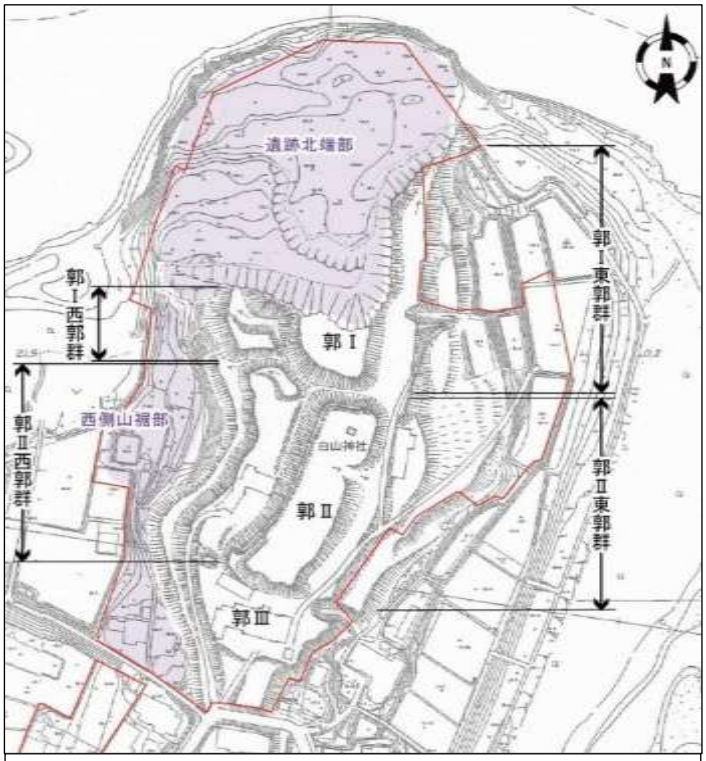

図１　白鳥舘遺跡縄張図

調査成果

①竪堀跡（20SD1）

郭Ⅰ東郭群の虎口とされていた箇所（Ｔ１）を調査した結果、丘陵を東西に横断する竪堀であることが確認され、従来いわれていた虎口ではないことがわかりました。堀跡 20SD1 は上幅 4.5m、下幅 0.3m、深さ 2.3m の断面Ｖ字状の堀跡で、東の北上川方向へまっすぐ延伸しています。自然に堆積した土で埋まっていることから、お城の最終末期である 15 世紀半ばごろの遺構と考えられます。

郭Ⅰよりも南側で城域を区画する大規模な竪堀跡が確認されたことにより、白鳥舘の主郭は、郭Ⅱである可能性が高まりました。

②鍛冶炉跡（20SK２）、整地層

郭Ⅰの東斜面の狭小な平場（Ｔ２）では、15 世紀のお城の改変に伴う整地層と、改変される前の時期の鍛冶炉跡 20SK2 が発見されました。鍛冶炉跡は直径 40 ㎝で、強く火を受けています。周囲からは鉄を鍛えたときに飛び散る細かい鉄片が出土していることから、刃物などのように叩いて鍛える鍛冶（鍛造鍛冶）が行われていたことがわかりました。

③集石遺構（20SX3）

郭Ⅰの東斜面の狭小な平場の北端部（Ｔ３）では、お城の改変に伴う整地層と、その下層から集石遺構が確認されました。集石遺構（20SX3）は、南北 3.1m、東西１m以上で、周囲には細い溝跡が伴っており、集石の周囲を方形にめぐっているとみられます。遺構の形状からは、お墓の可能性が高いと考えられます。この地点のさらに北の斜面を調査した３次調査では、14 世紀前半ごろの瀬戸産の広口壺の破片が出土していることから、丘陵北端部は、お城として利用される以前には、墓域として利用されていた可能性が出てきました。

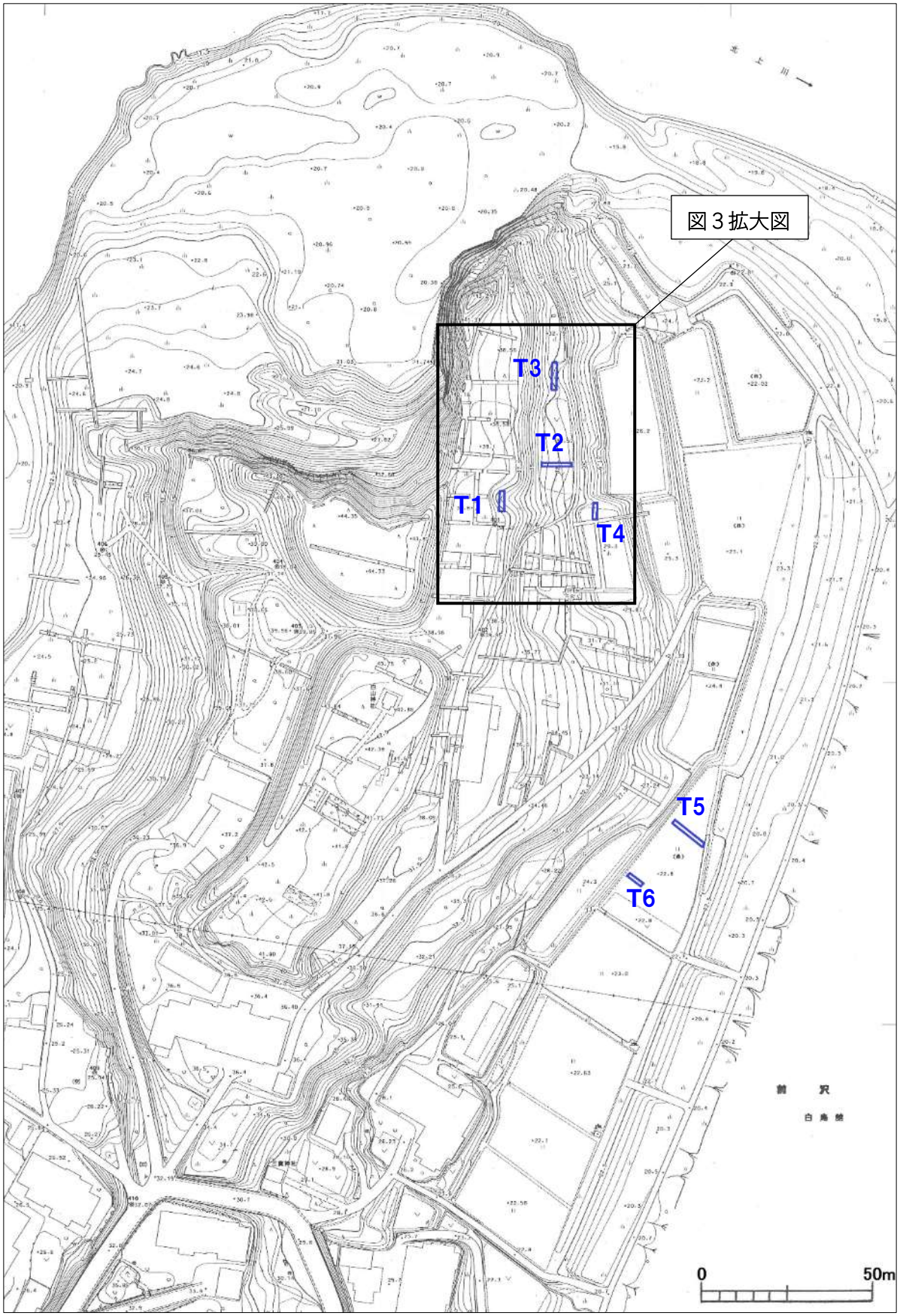

図２　白鳥舘遺跡第 20 次調査区位置図

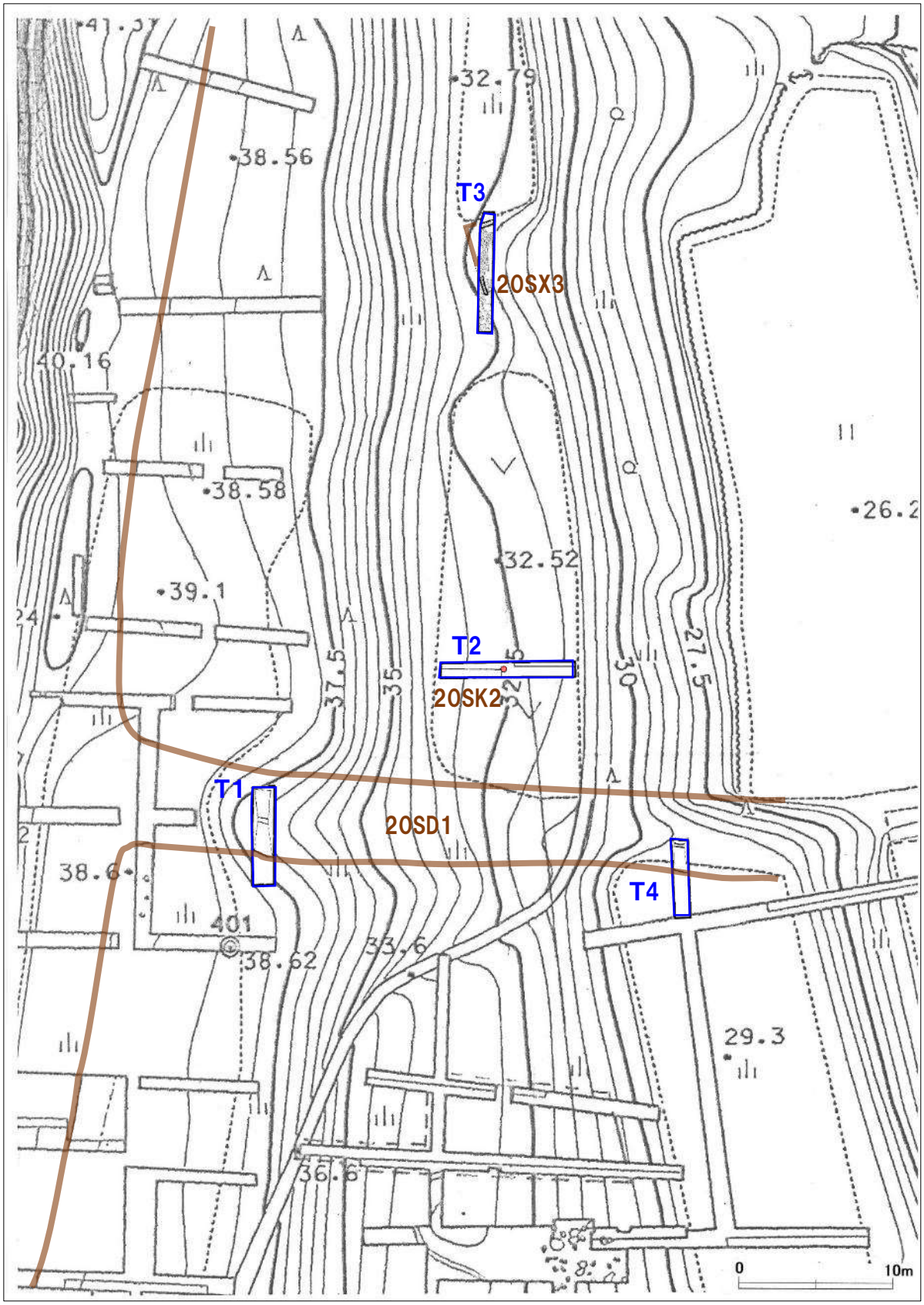

図３　白鳥舘遺跡第 20 次調査遺構配置図

Ｔ１　郭Ⅰ東郭群　虎口跡（北から）

Ｔ４　郭Ⅰ東郭群　虎口跡（東から）

Ｔ２　郭Ⅰ東郭群　鍛冶炉跡（南から）

Ｔ３　郭Ⅰ東郭群　集石遺構（北から）